

HOT TOPIC

ペットにおける食物アレルギーと食物不耐症



概要

「食物アレルギー」や「食物不耐症」という用語は同じ意味で使われることも多いですが、両者は同じではありません。両者をどのように比較し、診断や管理を行えばよいでしょうか。

栄養に関するコミュニケーションに必要な科学的事実をPurina Institute (ピュリナインスティテュート) がお届けします。

let's
takeback
the conversation.

栄養学について詳しくはこちらから

PurinaInstitute.com

食物アレルギーと食物不耐症の違いとは？

食物アレルギーと食物不耐症は食物有害反応の一種です。これらは「正常な」食物または食品添加物に対する異常な(予期しない)反応の例です。この一方で、食中毒なども食物有害反応ですが、これは異常な食物に対する正常な(予期される)反応です。

食物アレルギーはペットの免疫系が食事の特定の成分に反応することで生じます。すべてのアレルギー反応が、食物に最初に曝露されたときに起こるとは限りません。免疫系がアレルゲンを認識するためには、過去の曝露経験が必要になります。**食物不耐症**は特定の免疫成分に関する反応として認識されることはありません。食物不耐症は、食物を初めて摂取したとき、または既に摂取したことがあるとき、のいずれの時点でも起こる可能性があります¹。食物不耐症の種類には、代謝性(乳酸不耐性など)と特発性があります²。

実際には、食物アレルギーと食物不耐症の区別がなされることはまれです。病因は異なりますが、臨床徴候、診断および栄養管理は同一ではないにしても類似しています³。

食物アレルギーと食物不耐症の臨床兆候

食物アレルギーや食物不耐症のペットで見られる臨床徴候は類似しており、特に皮膚や消化器では同様の臨床徴候が認められます^{3,4}。最も共通する皮膚徴候は非季節性の掻痒で、一般的に、猫では頭部、頸部および顔に限局し、犬では全身に見られます。

犬で限局性の場合に多い発症部位は耳、足、腹部または顔です⁵。特に多く見られる消化器徴候は下痢と嘔吐です⁴。

食物アレルギーと食物不耐症の有病率

犬や猫における食物アレルギーと食物不耐症の有病率はさまざまです。その理由の一部として、評価した個体数や診断法が異なっていたことが挙げられます⁶。

皮膚症状を呈して皮膚専門の動物病院または大学の動物病院を受診した犬の

24% が食物アレルギーまたは食物不耐症と診断されたのに対し、皮膚症状を呈して一般動物病院を受診した犬ではわずか

0.4% が食物アレルギーまたは食物不耐症と診断されました^{6,7}。

食物のアレルゲンはタンパク質です。あらゆる食物に含まれるタンパク質がアレルゲンとなる可能性があります。ペットフードに特に多いアレルゲンはペットフードに最も多く含まれるタンパク質で³、その内訳は国によって異なります。

ペットフードに多いアレルギー源^{1,8}

牛肉 (40%)
乳製品 (20%)
鶏肉 (13%)
小麦 (11%)
鶏卵 (7%)
ラム肉 (5%)



牛肉 (20%)
魚類 (15%)
乳製品 (14%)
ラム肉 (6%)
家きん肉 (5%)
大麦／小麦 (4%)



食物アレルギーと食物不耐症の診断

除去食試験は、ペットにおける食物アレルギーと食物不耐症の標準的な診断法です^{1,4}。血液、皮内、パッチ、唾液および被毛を用いた検査法は妥当性が確認されておらず、食物アレルギーの診断として信頼できるとはいえません⁴。

除去食試験では、自家製ペットフード、タンパク質を加水分解した市販ペットフードやアミノ酸ベースの市販ペットフード(総合栄養食)、または新規タンパク質を材料とする食事などの除去食を与えます⁴。加水分解フードや総合栄養食は、食事の記録が不完全または一貫性がなく、新規タンパク質を特定できない場合には特に有用です⁹。加水分解フードに含まれるタンパク質は分解されているため、身体がアレルゲンを認識する可能性は低くなります^{1,10,11}。アミノ酸ベースの療法食はタンパク質を最も単純な形であるアミノ酸として含有しているため、感受性が非常に高いペットであっても食事管理に役立つ可能性があります⁹。

皮膚徴候が見られるペットではこれらの食事を少なくとも8～12週間継続する必要があります。消化器徴候は2～4週間の食事ですぐに回復します。再感作(リチャレンジ)に要する時間を考慮すると、診断を確定するまで、さらに時間がかかる場合があります。除去食試験を成功させるには、ペットオーナーに指示を守ってもらうことが重要であり、除去食のみを与える必要があります⁴。主要タンパク源以外にも、穀物や他の原材料にタンパク質アレルゲンが含まれることがあるため、食事に含まれる各成分を検討する必要があります²。



食物アレルギーまたは食物不耐症の診断が確定したペットの長期栄養管理では、特定されたアレルゲンもしくは問題となる原材料の除去、あるいは加水分解フード、アミノ酸ベースの療法食または新規タンパク質を原材料とするバランスのとれた総合栄養食の継続が必要です¹。

参考文献

- Verlinden, A., Hesta, A., Millet, S. & Janssens, G. P. J. (2006). Food allergy in dogs and cats: A review. *Critical Reviews in Food Science and Nutrition*, 46, 259–273.
- Gaschen, F. P., & Merchant, S. P. (2011). Adverse food reactions in dogs and cats. *Veterinary Clinics of North America: Small Animal Practice*, 41, 361–379.
- Mandigers, P., & German, A. J. (2010). Dietary hypersensitivity in cats and dogs. *Tijdschrift voor Diergeneeskunde*, 135(19), 706–710.
- Mueller, R. S., & Unterer, S. (2018). Adverse food reactions: Pathogenesis, clinical signs, diagnosis, and alternatives to elimination diets. *The Veterinary Journal*, 236, 89–95.
- Olivry, T., & Mueller, R. S. (2019). Critically appraised topic on adverse food reactions of companion animals (7): Signalment and cutaneous manifestations of dogs and cats with adverse food reactions. *BMC Veterinary Research*, 15(1), 140. doi: 10.1186/s12917-019-1880-2
- Olivry, T., & Mueller, R. S. (2019). Critically appraised topic on adverse food reactions of companion animals (3): Prevalence of cutaneous adverse food reactions in dogs and cats. *BMC Veterinary Research*, 13(1), 51. doi: 10.1186/s12917-017-0973-z
- Hill, P. B., Lo, A., Eden, C. A. N., Huntley, S., Morey, V., Ramsey, S., Richardson, C., Smith, D. J., Sutton, C., Taylor, M. D., Thorpe, E., Tidmarsh, R., & Williams, V. (2006). Survey of the prevalence, diagnosis and treatment of dermatological conditions in small animals in general practice. *Veterinary Record*, 158(16), 533–539.
- Mueller, R. S., Olivry, T., & Prélard, P. (2016). Critically appraised topic on adverse food reactions of companion animals (2): Common food allergen sources in dogs and cats. *BMC Veterinary Research*, 12, 9. doi: 10.1186/s12917-016-0633-8
- Cave, N. J. (2006). Hydrolyzed protein diets for dogs and cats. *Veterinary Clinics of North America: Small Animal Practice*, 36, 1251–1268.
- Jackson, H. A., Jackson, M. W., Coblent, L., & Hammerberg, B. (2003). Evaluation of the clinical and allergen specific serum immunoglobulin E responses to oral challenge with cornstarch, corn, soy and a soy hydrolysate diet in dogs with spontaneous food allergy. *Veterinary Dermatology*, 14, 181–187.
- Puigdemont, A., Brazis, P., Serra, M., & Fondati, A. (2006). Immunologic responses against hydrolyzed soy protein in dogs with experimentally induced soy hypersensitivity. *American Journal of Veterinary Research*, 67, 484–488.